

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

**このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。**

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

漱石文庫の整理にたずさわって（４）

蔵書目録をめぐって

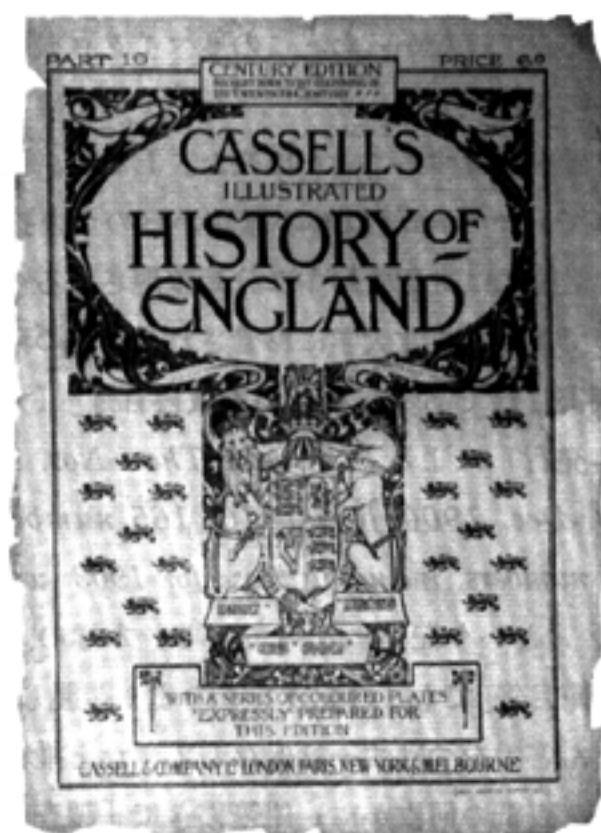
情報サービス課 閲覧第二掛長 湯 本 智 子

漱石は、当時早稲田南町にあった自宅の書齋を自ら「漱石山房」と称し、没する大正5年12月9日までこの山房で膨大な作品を生み出した。死後漱石の蔵書約3000冊は「漱石山房蔵書目録」（大正14年発行、岩波書店）として、公表された。この中には、外国雑誌12点が含まれるが、その中の数点には漱石が記事を主題毎に分類しようと試みた雑誌が何点かみられる。又、漱石研究者にとってバイブルともいえる山房目録に記載されていない資料が2点存在する。本稿では、これらの雑誌から2点、および「漱石山房蔵書目録」に記載されていない資料2点をとりあげ、それらの資料が保存されていた状況やそこから推量される事等を紹介してみたい。

Cassell's Illustrated History of England. (漱石文庫 No.810)

ペラ戦争から1901年までのイギリスの歴史が書かれた雑誌で、英国留学中に講読を始めたもので、日記には1週間に1冊到着したことが記されている。これとは別に紀元前55年よりペラ戦争までが書かれたこの雑誌のハードカバー版とも言えるべき単行本を1901年7月に入手している。この雑誌は、カラーのイラストと写真が多く印刷されてあるのだが、本誌とイラスト部分が分離されて表紙のみがまとまってくくられており、当然頁は混乱状態であった。漱石は、非常に美しいカラー写真を別に保存しようとしていたのではと推察される。カラー写真の部分を切り取ったために本誌の製本はばらばらになった。本誌部分には巻号、出版年の記述がないので、これを各々のコンテンツから号数をつきと

めた。漱石の試みようとした足跡を重視するのなら、資料に一切手をつけず原形のまま保存するのも意義ある事である。しかし、マイクロフィルム化の為に正確な資料の順序、即ち表紙、タイトル頁、コンテンツ、本誌、背表紙の形態に整理する必要があった。この雑誌には、幸い coloured plate の説明と頁が各号に付されていたので、分離されていた写真の本誌中の正確な挿入場所がつきとめられた。こうして概ね本来のイギリスの歴史を、カラープレートで順序よく読める資料に復元する事ができた。しかし、背表紙はどうしても巻号を判断できなかった。



Cassell's Illustrated History of England の表紙

The Studio (漱石文庫 No.981)

London で出版された月刊の美術・工芸・建

築雑誌（1893年創刊）でやはり1901年の英国留学時より講読し始め、帰朝後も継続して、丸善より講読していたものである。文庫の所蔵は1900年の12月号から1916年7月号までで、英国留学したときロンドンに到着して直ぐに購入し、以後没する大正5年まで16年間も定期講読していたことから、漱石が強い関心をもっていったことがうかがえる。この雑誌も非常に美しい色刷りの写真が掲載されており、漱石は、一時期写真のみを切り放し別に保存しようとした形跡が見られる。また、本誌部分も同類の記事を集めてファイルしようとしたのではと、推察される。この雑誌は、損耗度が激しく特に表紙はボロボロであり、本誌の中に全く別の雑誌の切り抜きが混入されていたり、本誌の中の数頁が分離されている状態の巻があり、閲覧に供する事が不可能な状態であった。何年か前に女子美術大学の利用者が、このように雑然とした *Studio* の中から何冊かを、根気強くコンテンツから正確な巻号に復元したが、片手間に整理がつく量ではなかった。この度マイクロ撮影のために欠号、欠頁、カラープレートの正確な挿入位置を把握することが出来た。しかし、混入されていた *Studio* 以外の雑誌からの切り抜きは、厳密には身辺資料中に分類整理されるべきものである。東北大学に移管される以前の漱石の蔵書目録である「漱石山房蔵書目録」（大正14年発行）によると「*Studio, The . Nos. 93-280. Dec. 1900-July 1916. 165 numbers. (23 numbers, including those for 1903. wanting) .*」という記述になっており、本学の「漱石文庫目録」でもこの記述をそのまま踏襲して、ほとんど手をつけず一括保存してきたと推察される。表紙の何枚かに、鉛筆書きで「調査のこと」というメモがあり、本学に移管される以前の整理者も、分離された本誌と表紙の整理に苦慮した跡が見られる。

Studio special numbers.（漱石文庫 No.982）

この中には *Studio* や次のような雑誌の表紙や切り抜き等が無秩序に混入されていた。

- *Royal Academy and New Gallery Pictures.* 1909 の表紙
- *Current Opinion* 1918 Feb. May, June の表紙
- *The Bairn's Magazine annual volume* の広告がある背表紙（雑誌名は不明）
- *Fairy Soap* の広告が載っている雑誌切り抜き3枚。この3枚の広告の裏はいずれも色刷りの絵が書いてあるが、子供の顔の石鹸の広告に漱石は関心を示したように思われる。なぜなら、他の身辺資料中にも *sun light soap* の広告の切り抜きが数枚みられるからだ。しかも、その中の一枚の子供の写真には鉛筆で唇と鼻に修正を加えてある跡が見られる。
- *Fatima* というたばこの広告（漱石のような髭をたくわえた男性の色刷りの絵）
- *Cream of wheat* の広告（新聞売りの子供の絵）
- *Tancred and Clorinda* と題する写真（裏は *A Knight of Labour* と題する写真）
- 世界地図 *The World Showing British Possessions 1902* (London: Cassell&Company, Limited.)
- *Current Literature* の表紙
- *2000 Men of the Day : A Handbook to the Encyclopaedia Britannica Contributors.*
- T. Terada: *Note on vibrations of drum.* No.17. p.349 1枚のみ（寺田寅彦の同名の論文・漱石文庫 No.940 の一葉が紛れ込んだものか。）
- *The Far East.* vol.10, No.247 1916（東京・ゼ・ファー・イースト社）
- *The Athenaeum* No.4567（漱石文庫 No.1119 不要という書き込みあり）
- *Windsor Magazine.* vol.143 No.257 1916 の表紙（漱石文庫 No.1128）
身辺資料にもしており、絵はがき、「新小説」

「ホトトギス」等の表紙切り抜きが残されていた。特に、漱石は石鯨の広告のイラストに見られる子供に関心を持っていたように思われる。又、この雑誌を英国よりしばしば日本の友人に送付していたことが、留学時代の日記に記されている。



Studio の表紙

Phillips, Stephen. *Paolo and Francesca; the St. James's Theatre, by George Alexander* [actor as Giovanni Malatesta] London. Miles, n.d. 12p. (漱石文庫 No.117-B)

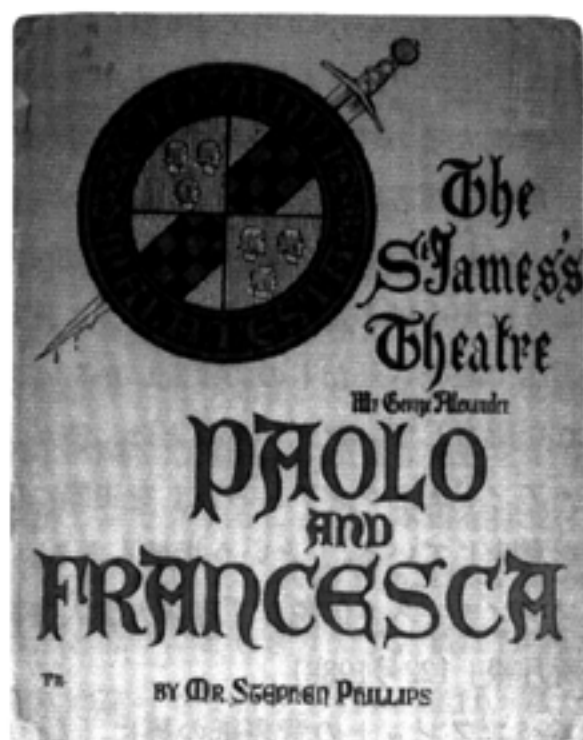
この資料は「漱石山房蔵書目録」には記述がない。ロンドンのセントジェームス劇場で公演されたダンテの「神曲」地獄篇第5曲のパオロとフランチェスカの悲劇を題材にした同名の演劇のパンフレットである。英国留学時代の日記に漱石がこの演劇を観たという記録はないが、「セント・ジェームス座というのがあって、そこにはアレキサンダーという役者の出る処で、ステーション・フィリップスの劇詩、パオロ、エンド、フランチェスカを演ったのが、即ち此座(ここ)なのです。」と語っている。(英国現今の劇況：漱石全集16巻)「フィリップスのこの作品

が上演されたのは、1902年3月6日から同年6月5日までであり、これは漱石のイギリス留学最終年にあたる(中略)…この小冊子は、(中略)…劇場で観客に販売されたものであって、目録に“n.d.”つまり発行年なし、とあるのも、このような理由による。換言すれば、これは一般の書店で販売されたものではないから、漱石がこれを所有していたということは、彼が『パオロ・アンド・フランチェスカ』を実際に観たことを意味している。」という指摘もある。(塚本「フランチェスカ伝説」,「専修大学人文科学研究所月報」122号1988)

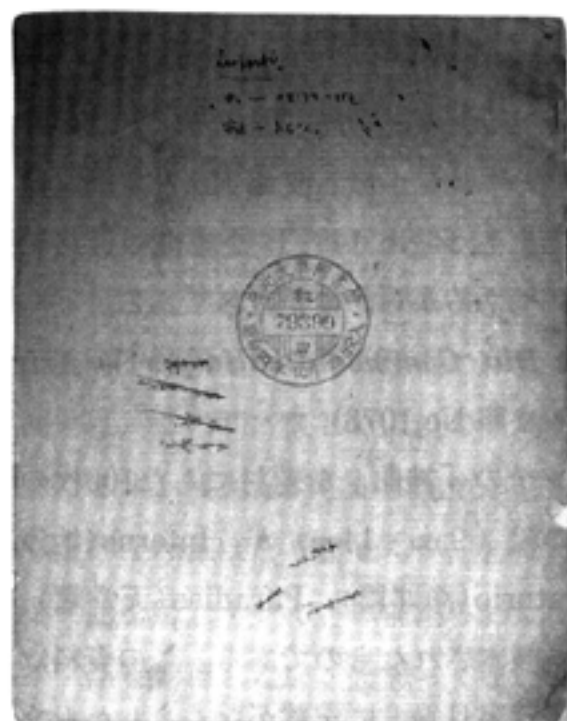
そしてパンフレットの背表紙の裏に「Leopardi. 母-小野ノ話-財産 宗近-京都人」という漱石の筆跡でメモがある。これは、明らかに「虞美人草」の構想メモである。Leopardi, Giacomo(1798-1837)はイタリアの詩人で *Essays, Dialogues, and Thoughts of Count Giacomo Leopardi* が漱石文庫 No.732 に収蔵されている。なお No.117-B は雑書の最後の No. が1117であるから、校正ミスである。

Della Div. Commedia edita per V. Arinari.
(漱石文庫 No.1078)

ダンテの「神曲」を題材にした100枚のモノクロの絵(9cm×14cm)が、Inferno(地獄篇), Purgatorio(浄罪篇), Paradiso(天堂篇)の3分冊に製本されたものである。この資料は「漱石山房蔵書目録」に記載がなく、しかも文庫整理番号が付与されているが本学の「漱石文庫目録」にも印刷されていない資料である。ダンテ「神曲」は *The Inferno of Dante Alighieri, The Purgatorio of Dante Alighieri, The Paradiso of Dante Alighieri* (漱石文庫 No.668~No.670)としてイタリア語と英語の対訳の本が存在し、この本と100枚のモノクロ絵のサイズが同じなので付録のようなものかと考えたが、本の中にはそのような記述はされていないので、別々に入手したのであろう。サイズから推すと、絵



「パオロ・アンド・フランチェスカ」
の劇場用パンフレット



パンフレットの背表紙に書かれてあった
漱石の自筆メモ

はがきと思われる。製本形態のまま漱石が入手したのか、或いは100枚セットの絵として入手してその後製本したものが不明だが、山房目録に記載がないこと、資料に受入番号が付与されていないこと、漱石の蔵書印がないことから推量すると、本学が保管の観点より製本したものと思われる。

このダンテの「神曲」の中でも特に漱石は、

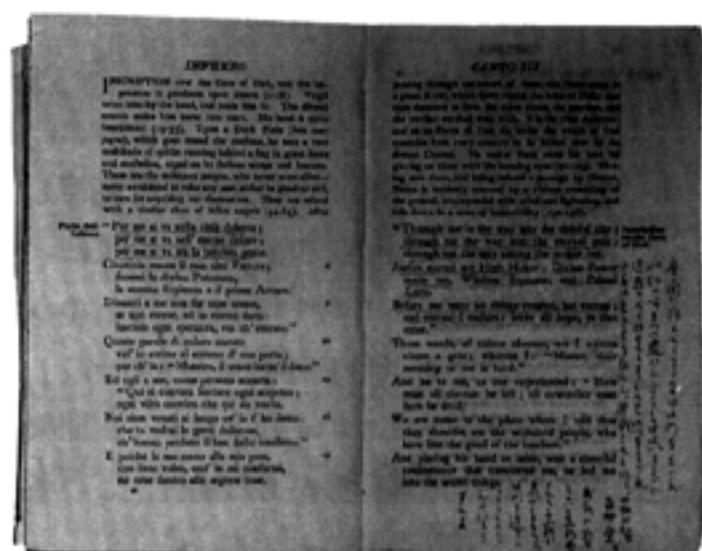
地獄篇に関心を示し多くの傍線と一部分の翻訳を書き込んでいる。地獄篇の第3曲の1から9節を英語の翻訳から漱石は、「憂の国に行かんとする者は此門をくぐれ 永劫の呵責に遭はんとする者は此の門をくぐれ 迷惑の人と伍せんとするものは此の門をくぐれ 正義は高き主を動かし、神威われを作る、最上智、最初愛。我前に物なし只無窮あり、われは無窮に忍ぶものなり、此門を過ぎんとするものは一切の望みをすてよ」と訳している。

同じ部分がイタリア語から「我を過ぐれば憂いの都あり、我を過ぐれば永遠の苦患あり、我を過ぐれば滅亡の民あり 義は尊きわが造り主を動かし、聖なる威力、比類なき知慧、第一の愛我を造れり 永遠の物として我よりさきに造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、汝等ここに入るもの一切の望みを棄てよ」(岩波文庫 山川丙三郎訳 ダンテ神曲―地獄― 昭和37年)と翻刻されており、英語からおこした漱石の翻訳と原著からの訳を比較すると興味深い。



ダンテ「神曲」の絵を製本した資料

「天堂篇」第2曲、ダンテとベアトリーチェを描いた部分で、絵の下に「ベアトリーチェは上方を、我は彼を見き、しかして矢の弦を離れ、飛び、止まるばかりの間に、我は奇しき物ありてわが目を惹けるところに着きあたり……」(山川訳)とイタリア語で書いてある



ダンテ「地獄篇」(第3曲1～9節)へ書き込んだ漱石の
翻訳 *The Inferno of Dante Alighieri*(漱石文庫 No.668)

約3000冊に及ぶ漱石文庫の書誌的研究はもとより、蔵書中の書き込み・傍線の有無、作品への引用箇所等について、多くの文献・論文が発表されている。しかし、今なお多くの閲覧・見学の希望があることを考えると、漱石文庫は限

りなく奥深く、無尽蔵に未知の部分が掘がっているように思われる。又、漱石の作品は現代の日本人の心の琴線にも充分触れる魅力が潜んでいることを物語っている。漱石の遺書ともいべき膨大な資料が、存在し続ける限りその研究も絶えることはないだろう。超人漱石は、このことを100年前に予見していたのではないだろうか。蔵書への膨大な書き込みや彼自身の手により保管されてきた紙片類の山やあたかも未来の研究者の利便を意識して書かれたような日記等を見ると、そう感ぜずにはいられない。

電子図書館構想が急速に語られている今、誰でも気軽に画像上で漱石文庫に出会える日も近い事と思われる。特に本学の学生には一人でも多く、母校が所蔵する漱石文庫に触れてもらいたい事を願って、整理者としての立場より4回に渡って執筆した拙文を終わりたい。

(ゆもと・ともこ)

規則等の改正について

東北大学附属図書館本館利用規則の一部を改正する規則をここに公布する。

平成9年2月19日

東北大学附属図書館長 小山 貞 夫

東北大学附属図書館本館利用規則の一部を改正する規則

東北大学附属図書館本館利用規則の一部を次のように改正する。

第3条中「特別閲覧証」の次に「及び東北大学が発行する学生証又は身分証明書」を加える。

第4条中「午後8時」を「午後9時」に改める。

附則

この規則は、平成9年4月1日から施行する。

東北大学附属図書館本館利用規則の一部を改

正する細則をここに公布する。

平成9年2月19日

東北大学附属図書館長 小山 貞 夫

東北大学附属図書館本館利用規則の一部を改正する細則

東北大学附属図書館本館利用規則の一部を次のように改正する。

第3条中「第1号」を「第3号」に改める。

第3条の2中「在職又は」を削る。

第4条中

「

(5)研究閲覧室	平日 午前9時から午後5時まで
(6)参考コーナー	

」

「

(5)参考コーナー	
(6)研究閲覧室	平日 午前9時から午後5時まで

」

に改める。

第11条中「(閲覧許可証を含む。)」を削る。

第12条中「午後7時50分まで」を「午後8時50分まで」に改める。

附則

1 この細則は、平成9年4月1日から施行する。

2 第3条の規定にかかわらず、規則第2条第1項第2号に該当する者の内、研究生、科目等履修生については、当分の間、利用者登録申請書を提出し利用証の交付を受け

るものとし、利用証の有効期限は在籍期間とする。

3 第9条に定める貸出図書の返却を延滞している者への貸出停止の取扱については、規則第11条別表第1の「利用者区分」のうち「大学院学生(科目等履修生を除く)」に対しては、平成9年4月1日から、開架図書について返却延滞がある場合、この条項の適用をしないものとする。

思 い つ く ま ま に

医学分館事務長 佐 藤 定 夫

例えば、昭和30年3月第一教養部の図書館に奉職して以来、41年の歳月はあつという間に過ぎ去り、医学分館を最後に間もなく定年の3月を迎えようとしております。今更ながら、時の流れの早さに驚いている今日この頃です。附属図書館広報委員会から、図書館を去るに当たっての寄稿依頼があり、筆不精の私ですがタイトルのように思いつくまま過ぎし日の足跡を辿って見ました。

第一教養部は、富沢の旧幼年学校跡地(現在は原子核理学研究施設、富沢職員宿舎、桜の名所三神峯公園がある)で環境に恵まれた広い敷地を利用しており、図書館は正門入ってすぐ左側の静で見晴らしの良い所にありました。当時、富沢までの交通機関は、長町駅から秋保温泉までの秋保電鉄が唯一という不便な所でしたが、私たち職員は先生方の連絡用スクールバスを利用出来たのでさほど不便を感じませんでした。

就職当初、図書館の仕事のことは何も分からず、先輩の助けを借りて夢中で働く毎日でした。その後、第一教養部は富沢分校と改称され、図

書館も富沢分校分館として発足しました。

昭和32年に米軍が北日本の軍事基地として使用していた川内キャンプを撤退したため、東北大学に移管され、昭和33年4月、富沢分校の文科系学部(文・法・経)が川内に引越と同時に、分館も文科系の資料を携えて職員2名(私と年配の優しい女性)と共に、図書館(米軍の物資部の倉庫)に移転しましたが、図書館とは名ばかりの建物で窓はすべて頑丈な金網で保護され、透き間風の通る寒い所での窓口業務が懐かしく思い出されます。同年9月に残りの理科系学部(理・医・工・農)の移転も完了し、富沢分校が川内分校となり、川内地区の新しい学園づくりが進むなか、川内分校も教養部(図書館も教養部分館となる)と改称して再発足しました。この頃から大学の総合移転が始まり、教養部の関連施設の完備、附属図書館の新築工事の着工、文科系4学部の建築敷地の決定など川内地区は学びの丘として充実されて来ました。その間、昭和44年にあの悪夢の学園紛争は最悪の事態となり理科実験棟封鎖解除の機動隊導入等

は忘れることはできません。

昭和47年10月、附属図書館が川内地区に竣工されると同時に、教養部分館の廃止・統合により10数名の職員は、それぞれの掛に配属され、私は新設された渉外掛（後に企画・渉外掛）に席を置くことになりました。

その頃、図書館の広報誌「図書館通信（月刊）」は諸般の事情で休刊していたが復刊の希望が無くなったため、それに替わる図書館報の発行が決まり編集事務を担当することになりました。館報の副題は募集することにし何点かの応募作品から、当時の庶務掛長大友弘基氏の作品「木這子」が副題に決まった。また、「木這子」を題材にした館報の標題は、文学部助手（参考調査掛兼任）高木忠氏のデザインにより、館報の顔とも言われる標題が完成し、昭和50年4月、東北大学附属図書館館報「木這子」の創刊号を世に送り出すことが出来たのも、大きな思い出となっております。自分が手掛けて刊行した「木這子」に、平成9年3月31日の卒業（退職）と同日月日で発行される館報に投稿することは、何か不思議な気がいたします。

昭和52年4月工学部図書掛に移って間もなく、分館の設置と建築の事務に携わり、附属図書館、工学部の皆さんの協力をいただきながら、悪戦苦闘のすえ、昭和53年、工学分館の設置が認められ工学部経理課図書掛は附属図書館工学分館として新たにスタートしました。続いて、昭和55年に新営工学分館の竣工を見ること

が出来たのも、つい昨日のようによみがえってきます。

昭和57年4月1日附属図書館閲覧課相互利用掛に、昭和58年閲覧課閲覧掛、昭和62年管理課和漢書目録掛に配置換えになり、利用者へのサービス業務から、資料の整理業務を担当し、平成3年総務課に配置換え早々、偶然にも、又々図書館の広報を担当する事になり、図書館の運営について学内関係者に理解をしていただくため、附属図書館速報「らいぶらりNOW」第1号を、平成3年6月に発行以来、本年2月現在42号まで発行されている。

昨今、図書館を取り巻く環境の変化と、情報量の増大に対し、電子図書館構想など、各大学図書館が今後如何なる方向に進むか大きな転機を迎えようとしているなかで、東北大学附属図書館も21世紀をめざして、これまで以上に本館・分館間の協力体制を更に深めることが必要と思います。

平成5年、最後の職場となった医学分館に移って、4年間の思い出はいろいろあるが、館報の紙面上割愛しなければならないことをお詫びしたい。

最後に41年間、無事に勤務することができたのは、優れた先輩・同僚・後輩の、ご指導、ご支援の賜ものと感謝し、各位の益々の発展をお祈り申し上げ、ペンを置きます。

（さとう・さだお）

お 知 ら せ

平成9年度・東北大学附属図書館（本館）の開館計画について

このことについて、下記のとおりお知らせします。

なお、この計画を変更する場合は、その都度お知らせします。

記

I. [開館時間]

平 日 9：00～21：00

土曜日 9：00～17：00

但し、次の期間は開館時間を変更します。

期 間	開 館 時 間
平成9年4月1日（火）～4月5日（土）	平 日 9：00～17：00 土曜日 9：00～12：30
〃 8月2日（土）～8月30日（土）	
〃 12月20日（土）～12月24日（水）	
平成10年2月14日（土）～3月31日（火）	

II. [休館日]

（1）日曜日

（2）国民の祝日に関する法律・第3条に規定する休日

（3）本学創立記念日（6月22日）

（4）年末年始（12月25日から翌年1月5日まで）

（5）本学学位記授与式当日（3月25日）

（6）館長が必要と認めた日

東北大学附属図書館（本館）
平成9年度（1997年度）・開館計画表

4 月	日	月	火	水	木	金	土	10 月	日	月	火	水	木	金	土
	*	*	1	2	3	4	5		*	*	*	1	2	3	4
	⑥	7	8	9	10	11	12		⑤	6	7	8	9	⑩	11
	⑬	14	15	16	17	18	19		⑫	13	14	15	16	17	18
	⑳	21	22	23	24	25	26		⑬	20	21	22	23	24	25
	㉑	28	㉒	30	*	*	*		㉑	27	28	29	30	31	*
5 月	日	月	火	水	木	金	土	11 月	日	月	火	水	木	金	土
	*	*	*	*	1	2	③		*	*	*	*	*	*	1
	④	⑤	6	7	8	9	10		②	③	4	5	6	7	8
	⑪	12	13	14	15	16	17		⑨	10	11	12	13	14	15
	⑱	19	20	21	22	23	24		⑯	17	18	19	20	21	22
	㉑	26	27	28	29	30	31		㉑	㉒	25	26	27	28	29
6 月	日	月	火	水	木	金	土	12 月	日	月	火	水	木	金	土
	①	2	3	4	5	6	7		*	1	2	3	4	5	6
	⑧	9	10	11	12	13	14		⑦	8	9	10	11	12	13
	⑮	16	17	18	19	20	21		⑭	15	16	17	18	19	20
	㉑	23	24	25	26	27	28		㉑	22	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖
	㉑	30	*	*	*	*	*		㉑	㉒	㉓	㉔	*	*	*
7 月	日	月	火	水	木	金	土	1 月 (10年)	日	月	火	水	木	金	土
	*	*	1	2	3	4	5		*	*	*	*	①	②	③
	⑥	7	8	9	10	11	12		④	⑤	6	7	8	9	10
	⑬	14	15	16	17	18	19		⑪	12	13	14	⑮	16	17
	⑳	㉑	22	23	24	25	26		⑱	19	20	21	22	23	24
	㉑	28	29	30	31	*	*		㉑	26	27	28	29	30	31
8 月	日	月	火	水	木	金	土	2 月	日	月	火	水	木	金	土
	*	*	*	*	*	1	2		①	2	3	4	5	6	7
	③	4	5	6	7	8	9		⑧	9	10	⑪	12	13	14
	⑩	11	12	13	14	15	16		⑮	16	17	18	19	20	21
	⑰	18	19	20	21	22	23		㉑	23	24	25	26	27	28
	㉑	25	26	27	28	29	30		*	*	*	*	*	*	*
9 月	日	月	火	水	木	金	土	3 月	日	月	火	水	木	金	土
	*	1	2	3	4	5	6		①	2	3	4	5	6	7
	⑦	8	9	10	11	12	13		⑧	9	10	11	12	13	14
	⑭	⑮	16	17	18	19	20		⑮	16	17	18	19	20	㉑
	㉑	22	㉒	24	25	26	27		㉑	23	24	㉒	26	27	28
	㉑	29	30	*	*	*	*		㉑	30	31	*	*	*	*

注1) ○印：休館日

2) △印：休館日（予定）

3) 内：開館時間の変更期間

平日－9：00～17：00

土曜日－9：00～12：30

会 議

◎学 内

- 9. 1.28 施設の将来構想に関する検討委員会
(第2回)
- 2.10 記念資料室運営委員会専門委員会
- 2.17 記念資料室運営委員会
- 〃 平成8年度第3回分館長会議

○協議事項

- (1) 附属図書館本館利用規則等の改正について
- (2) 附属図書館文献複写料金徴収猶予実施細則の改正について
- (3) 附属図書館データベースサービスの拡大・充実について
- (4) 商議会(平成8年度第3回)の開催について
- (5) 各館の概算要求について
- (6) 平成8年度自然科学系外国図書収書計画について
- (7) 電子図書館システム委員会の設置について
- (8) その他

2.19 平成8年度第3回附属図書館商議会

○協議事項

- (1) 平成10年度概算要求について

- (2) 附属図書館利用規則等の改正について
- (3) 附属図書館文献複写料金徴収猶予実施細則の改正について
- (4) 附属図書館データベースサービスの拡大・充実について
- (5) T-LINES次期システム検討委員会の報告について
- (6) その他

○報告事項

- (1) 各分館からの報告
- (2) 施設の将来構想に関する検討委員会について
- (3) 電子ジャーナル導入試行サービスの開始について
- (4) 電子図書館システム委員会の設置について
- (5) 電算機リプレースの進捗状況について
- (6) その他

2.27 施設の将来構想に関する検討委員会
(第3回)

◎学 外

- 9. 1.23 国立大学附属図書館事務部長会議
(於：金沢大)

編 集 後 記

新しい年が明けて早くも3ヵ月が過ぎようとしています。

4月を迎えると、今年も新入生の晴れやかな顔々が、キャンパスにあふれることになり、もちろん我が図書館にも多勢訪れてくれることと思っています。

当館では、平成8年度に開館延長の試行を午後9時まで行っていましたが、平成9年度から本格実施することになりました。より一層の利

用を期待したいと思います。

この頃、利用者からの投書に、利用者自身のマナーの悪さを指摘するものが寄せられてきていますが、図書館は個人のものではないので、お互い気を付けて利用していただきたいと願っています。

年度末で特に忙しいところ、本号のためにご寄稿いただきました皆様には、心から厚くお礼申し上げます。

(佐 藤)

東北大学附属図書館館報「木這子」 第21巻第4号(通巻77号)発行日 平成9年3月31日

発行人 辻 英雄 広報委員長 門田泰典

発行所 東北大学附属図書館 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5910